

平成10年度

すすんで環境にかかわって遊ぶ子

— 「楽しさ」を実感できる園庭や遊具の工夫 —

川崎市総合教育センター 幼児教育研究会議

すすんで環境にかかわって遊ぶ子

— 「楽しさ」を実感できる園庭や遊具の工夫 —

幼児教育研究会議

河内 澄子¹

長谷川眞知子²

鈴木 千里³

本多 和子⁴

金井久美子⁵

要 約

幼稚園の園庭には、たくさんの固定遊具が並んでいる。しかしながら活用率は高くないようだ。また、固定遊具とかかわって遊んでいる幼児の姿からは、心身の充実感を伴う楽しさが、あまり伝わってこないようにも思える。

平成7年度には幼稚園設置基準が改正され、時代の進展や、各園の実情に応じ、遊具を創意工夫し、適切に整備することの必要性が盛り込まれた。

幼児が夢中になって遊ぶ遊具、そして夢中になって遊ぶ中で知らず知らずのうちに、望ましい力を育てていく遊具とはどのようなものであろうか。

本研究では、遊びの楽しさと楽しさの中で培われる力に着目し、幼稚園の実情に即した園庭や遊具の工夫を試みることにした。

まず、幼児が楽しさを感じていると思われる場面を数多く記録し、それを物とのかかわりという視点で検討することを通して、「楽しさとは何か」「楽しさを生み出すために必要な戸外環境要素とは何か」「楽しさの中で育つ力とは何か」をとらえようと試みた。

次に、これらの内容を検証するために、実際に園庭や遊具を工夫したり改善したりした後、そこにかかわって遊ぶ幼児の姿を記録し、幼児一人一人の育ちや幼児と戸外環境のかかわり方の変容を考察した。

これらの検討の結果、幼児が自らの思いや力で遊びを創り出すことができるような園庭や遊具を用意しておくことの大切さを実感するにいたった。

キーワード：幼児教育，楽しさ，戸外環境，環境構成，園庭，遊具，記録カード

目 次

I 主題設定の理由	70	2. カードによる記録と考察	73
1. 研究の意義	70	(1) 戸外環境に必要な要素を探る	73
2. 研究の考え方	70	(2) 楽しさの中で育つものを探る	74
(1) 戸外遊びの大切さについて	70	(3) まとめ	76
(2) 最近の幼児の実態	70	3. 園庭や遊具の工夫と実践	77
(3) 遊びの楽しさの重要性	70	(1) 戸外環境の素材を工夫する試み	77
(4) 幼稚園の戸外環境について	70	(2) 戸外環境を変化させる	78
II 研究の内容	71	(3) まとめ	84
1. 研究の方法	71	III 研究のまとめと今後の課題	84
(1) 研究の方法	71	1. 研究の成果	84
(2) 研究の手続き	71	2. 今後の課題	84
(3) 研究計画	71	おわりに	84
(4) 研究の枠組み	72	参考文献	84
		指導助言者	84

¹川崎市立古市場小学校附属幼稚園教諭（主任研修員）

²川崎市立河原町小学校附属幼稚園教諭（研修員）

³川崎市立平間小学校附属幼稚園教諭（研修員）

⁴川崎市立梶ヶ谷小学校附属幼稚園教諭（研修員）

⁵川崎市総合教育センター研修指導主事

I 主題設定の理由

1. 研究の意義

「幼稚園教育においては、幼児が興味や関心をもってかかわり、発達に必要な体験を得るような適切な教育環境を作り出すことが重要であり、そのような環境の下で幼児は幼児期にふさわしい生活を展開し、幼児の主体的な活動である遊びを通して様々な発達の基礎を身につけていくこと」¹⁾と幼稚園教育指導書に述べられている。

このような教育環境を作り出していく要素の一つとして、遊びを展開、発展させる役割をもつ遊具の果たす役割は重要であると考えられる。

さらに、近年の都市化などによって、幼児が生活の中でのびのびと体を動かす機会が減少してきている中、幼稚園における戸外環境の果たす役割は大きいものがあると考えられる。

従来、園具や教具は幼稚園設置基準において具体的に規定されていたが、平成7年2月幼稚園設置基準が改正されたことで、戸外環境も各園の創意工夫に任せられるようになり、幼児期にふさわしい生活が展開出来るよう整備していくことが求められているといえる。

2. 研究の考え方

(1) 戸外遊びの大切さについて

戸外遊びの良さは、遊びを十分楽しむ中で、手足を使ったり、全身を使ってのびのびと体を動かしたりすることにより、知らず知らず体力がつくことや、遊びに打ち込むことにより、挑戦する力や創造する力が身につくことにあると考えられる。

また戸外で自然の光を浴び、肌で風や雨を感じ取ることや動植物とふれあうことは、好奇心旺盛な幼児の感性に直接働きかけ、豊かな感性や表現力、意欲などを育てることにつながっていくであろう。

このような力は、人間形成の基礎となるものであり、したがって戸外での遊びは幼児期に最も必要かつ、大切なものだと考えられる。

(2) 最近の幼児の実態

最近の幼児は室内遊びに比べ、戸外遊びの経験が少なくなっている。そのことが体力の低下や疲れやすい子の増加につながっている。また地域社会においても、幼児たちが一緒に遊ぶ機会や自然にかかわってのびのびと体

を動かして遊べる場所が少なくなってきており、そのことが人とかかわっていく力の低下につながっていることが川崎市総合教育センターの調査で明らかになった。²⁾

(3) 遊びの「楽しさ」の重要性について

小田豊氏は、アメリカの心理学者NEUMANN, L. A氏の著書である「遊びの要素」について論じた中で、遊びの楽しさについて次のように書いている。「ニューマンは幼児の遊びには顕在機能と潜在機能の二つがあることを指摘している。顕在機能とは遊びそのものの目的である「楽しさ」であるとし、潜在機能とは楽しく遊んだ結果、潜在的に身につくかもしれない事柄（認知的発達、身体的発達、社会的発達、情緒的発達）を意味し、二つが分離して存在しているのではない。

幼児の遊びは楽しさがすべてであり、楽しさの追求の中で、自分が必要とする生きる力になる基礎を意識しない間に身につけているといえる。」³⁾

幼児の遊びにとって、楽しさがきわめて重要な意味をもっていることが、このことから分かる。

それだけに幼稚園の中では自らすすんで環境にかかわって遊びを作りだし、楽しさを存分に味わってほしいと願う。

(4) 幼稚園の戸外環境について

幼稚園の戸外環境をみると、幼稚園設置基準に基づいて置かれた固定遊具や砂場などが並んでいる。

しかしながらこれらの戸外環境が幼児の主体的遊びを作り出し、楽しさを実感できる環境になっているかというところでもないようだ。園庭に忘れられたように取り残されている遊具も少なくない。

本研究は、以上(1)~(4)の4点を踏まえつつ、幼児が自ら遊びを創造し、遊びに必要なものを作る楽しさを十分実感できる園庭や遊具のあり方はどのようにあればよいのか、幼児と物的環境のかかわりを通して探ってみたいと考え、次のような主題を設定した。

すすんで環境にかかわって遊ぶ子
- 「楽しさ」を実感できる
園庭や遊具の工夫 -

¹⁾ 文部省 『幼稚園教育指導書 増補版』 1998年 P23

²⁾ 川崎市総合教育センター 「幼稚園教育の将来展望」 1997年 P7~P10

³⁾ 小田 豊 著 「幼稚園じほう」第24巻第10号(全国国公立幼稚園長会事務局) 1996年10月号 P9

II 研究の内容

1. 研究の方法

(1) 研究の方法

- ・川崎市公立幼稚園4園における戸外遊びの様子をカードに記録し、戸外環境に必要な要素と楽しさの中で育つものを検討する。
- ・検討結果に基づいて戸外環境を変化させ、幼児の変容を探る。

(2) 研究の手続き

①「遊び」と「楽しさ」のとらえ方

本研究会議でいう「遊び」とは、幼児が主体的に行う楽しさを伴った活動をさす。

またここでいう「楽しさ」とは、幼児にとっては心身の充実を伴うものであり、教師にとっては、それが心身の望ましい育ちにつながる楽しさであるにとらえる。

そして、教師にとって大切なのは、遊びが楽しいと思えるような環境を、幼児の思いにそって、幼児と共に工夫していくことだと考える。

②遊びを記録する

幼児がどのような時に楽しさを感じているのかを明らかにするために、教師が幼児の遊びを観察し、「この遊びは楽しさを感じているな。」と思った場面をすぐにカードに記録する。

【記録カードを用いた理由】

- ・いつでも簡単に取り出せ、比較したり分類したりすることが容易であり、教師たちが研究を共通理解するために便利である。

【記録方法】

- ・カードには、幼児がすすんで環境とかかわり、楽しく遊んでいる場面をそのまま記録する。
- ・遊びを楽しんでいるかどうかは、幼児の表情、体の動き、言葉などで教師が判断する。幼児の内面の思いと教師の判断が食い違うことも予想されるが、ここでは多少のズレが生じてもやむをえないこととする。

【記録の観点】

- ・遊びの継続日数や継続時間
- ・遊びにかかわっている人数や仲間関係
- ・遊びに使用している場や遊具、用具、素材
- ・幼児の体の動きや表情、会話の内容 など

【記録期間と協力園】

- ・記録期間 平成9年7月～平成10年10月
- ・協力園 川崎市公立幼稚園4園（5歳児1年保育）

【記録カードの修正】

- ・記録開始当初、カードを2種類用意した。Aカードには幼児が環境とかかわって楽しく遊んでいる場面を記

- 録し、Bカードは一定時間内における固定遊具と幼児のかかわりの様子を記録することとした。Aカードは幼児の動きに着目し、Bカードは固定遊具に視点を据えて記録を行ったのである。しかし固定遊具は入園当初はすすんで利用する姿が多く見られたものの、2学期以降は使用されることが少なくなり、Aカードの記録からでもBカードの目的を読み取ることができると判断し、途中からBカードによる記録は中止した。
- ・カードはその時の幼児と物とのかかわりが一目でわかるように、できるだけ略図や略画を入れるように変えていった。略図や略画が記入されていることで、その場の様子がより鮮明に再現されるようになり、共通理解が容易になった。
- ・楽しいと思われる遊びの様子を、観点に添って記録することで、幼児の姿がそのまま記録された。しかし記録を繰り返す中で、その場で教師が感じた様々な思いを記録しておくことが、その場の様子やその教師の考えを知る上で大切なのではないかと考えるようになった。そこで幼児の姿を記録する欄と教師の思いなどを記録する欄（備考）を分けて記録を行うことにした。

【戸外遊び記録カード（修正後）】

カードNo.	遊び名	場所	園名
日時	年 月 日 ()	時 分～時 分	日目
			参加者 人
備考:			

(3) 研究計画

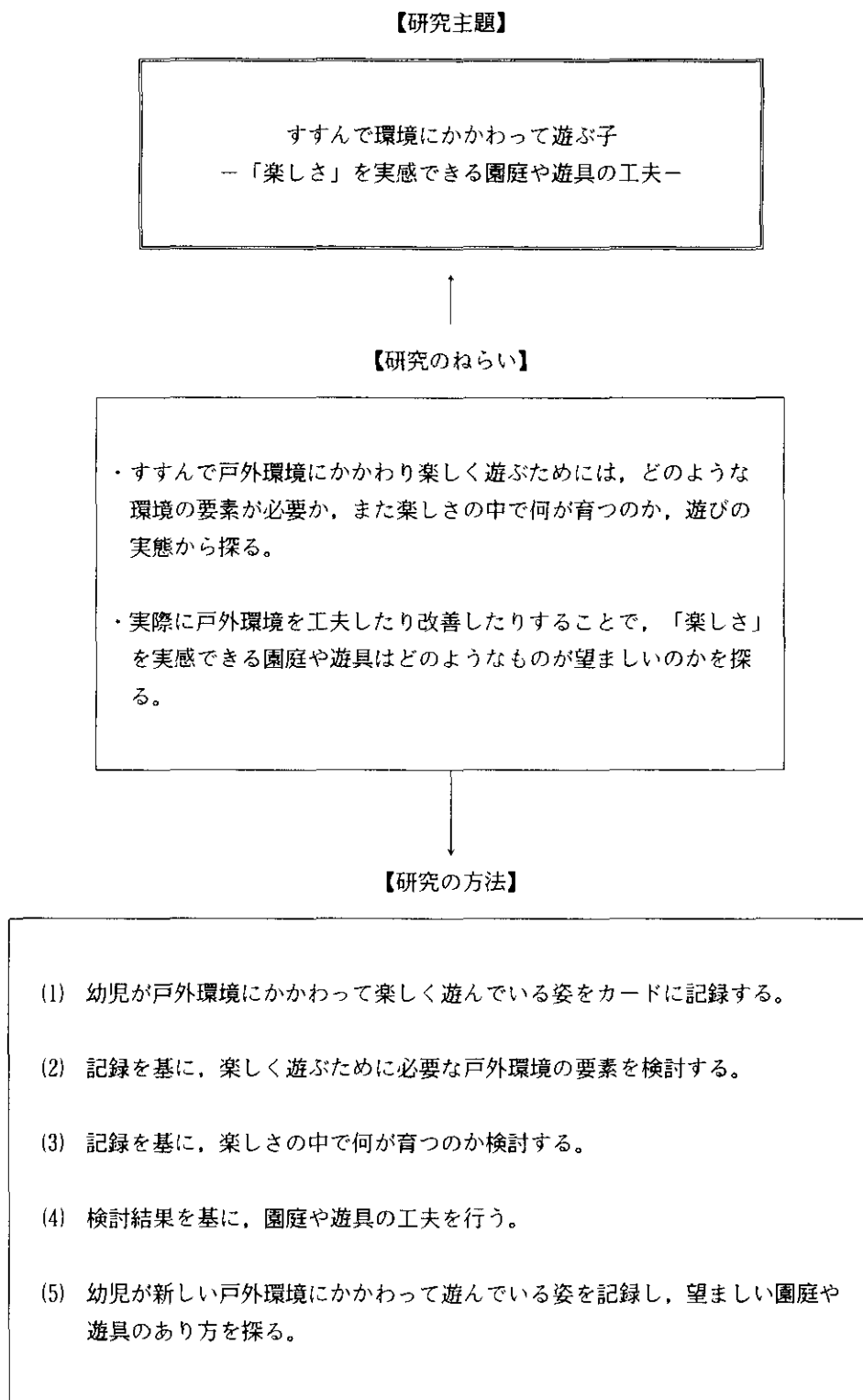
〈1年目〉

- ・幼児が戸外環境にかかわって楽しく遊んでいると思われる姿を1年間カードに記録し、収集する。
- ・集まったカードを整理することを通して、楽しく遊ぶための戸外要素は何か、楽しさの中で育つものは何かについて検討する。

〈2年目〉

- ・1年目の検討結果を基に、望ましいと思われる園庭や遊具を工夫したり、既存のものを改良したりする。
- ・幼児が新しい園庭や遊具にかかわって遊ぶ姿を検討することを通して望ましい戸外環境のあり方を探る。

(4) 研究の枠組み



備考：ここでは戸外環境という言葉を用いて、幼児がかかわる遊具、用具、素材、特定の場などの総称として使用する。

2. カードによる記録と考察

▷資料1-D園の園庭マップ（平成9年10月～11月）

幼児が心身の充実感もてる園庭や遊具を工夫するために、戸外でのびのびと体を動かしながら、十分に楽しんでいると思われる遊びをカードに記録し、それを基に環境に必要な要素と其中で何が育つのか把握する。

(1) 戸外環境に必要な要素を探る

①事例の検討

次のような観点で事例を検討し、幼児が好む戸外環境の条件を探る。

【考察の観点】

- ・遊びが生まれた場所（園庭マップを中心にして）
- ・経験している楽しさの内容

【手順】

- ・園庭マップを作り、カードがどこの場で記録されたのか記入する。（資料1）
- ・事例から経験している楽しさの内容を読み取る。



▷事例1

カードNo. 37	遊び名 バスごっこ	場所 小学校の雑木林	園名 D幼稚園
日時 9年11月 1日(木) 9時30分～11時00分・1日目		参加者 8人	
<ul style="list-style-type: none"> ・砂場道具が入っていたキャスター付きコンテナを押して、園庭で遊びはじめる。 ・園庭で行われていたバスごっこは、間もなく小学校の雑木林へ移動する。 ・雑木林の中に線を引いて、バスが通るコースを作りはじめる。 ・わざわざ起伏のある場所を選び、スピードが出せるように工夫をしている。 ・バスに乗りたい人が園庭に並びはじめる。 ・教師の提案でバス停を作り、整理係ができる。 ・バス停にベンチを運び、座って順番を待つ。 			
<p>※連日賑わいをみせ、バスのコースを毎日変えながら遊びが展開する。</p>			
<p>備考：幼児がコンテナを動かしている様子を見ると、起伏のある場でコンテナに乗り、スピードとスリルを味わうことと、操縦技術の上達を楽しんでいる。幼児は喜々として、毎日木の根が出ている地面や木々の間の曲がりくねった道、ちょっとした斜面などをうまく利用してコースを変化させ、いかにスリルあるものにするか工夫したり、お互いに運転技術を競い合ったりしている。一筋縄ではいかない地形がこの遊びの第一の魅力と思われる。</p>			



②事例の考察

○遊びが生まれた場所

- ・砂場道具を入れるコンテナと幼児との出会いが遊びの生まれたきっかけだが、園庭と続いている小学校の雑木林へコンテナを移動させたことで遊びの楽しさが広がっている。

○経験している楽しさの内容

- ・起伏のある地面や樹木の間自由にコースを工夫して設定し、スピード感やスリルを十分味わう。
- ・運転技術を競い合うことで、友達と一緒に遊びを共有する楽しさを味わう。

(2) 楽しさの中で育つものを探る

①事例の検討

次のような観点で事例を検討し、楽しさの中で育つものを探る。

【考察の観点】

- ・遊びのきっかけ
- ・遊びの中で育つもの（物とのかかわりを中心に）

▷事例2

カードNo. 28	遊び名 だんご作り	場所 ジャングルジムから園舎横	園名 C幼稚園
日時 9年10月17日(金) 9時50分~10時05分・3日目		参加者 13人	
<ul style="list-style-type: none"> ・K男とM男が、15日にジャングルジムの中で砂と水を混ぜ、だんごを作り始める。 ・16日、皆にだんご作りが広まり、ジャングルジム周辺でだんご作りが盛況だ。 ・K男が土の色の違いに気がつく。また、土が固くなっているのを触って、「がんせきだ!」と言う。 ・T男が別の場所(園舎横)に穴を掘って、だんごを作り始める。 ・17日、園舎横に集まり、3カ所の色が違う土を使ってだんごを作る。 ・T男が黒光りするだんごを作り、そのだんごを目指す子が出てくる。 ・しばらくの間、毎日のように園舎横で、だんご作りが続く。 			
備考: 土の色の違いの発見と、黒光りするだんごが土への関心を高め、土の性質について気づいていった。			

遊びのきっかけ	活動の流れ	物とのかかわりの様子
15日	15日 砂と水を混ぜただんご作りが始まる	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期に入り、久しぶりで砂だんご作りを友だち同士で楽しんでいる。 ・土が石の様に固くなっていることと、色の違いに気づいたことで、急速に土によるだんご作りに挑戦意欲が高まった。 ・仲間と情報を交換したり、作り方を試したりして、だんご作りの楽しさが増す。 ・3色の土の使い方、水と土の混ぜ具合、丸く作るための技術などを工夫する。 ・自分の作っただんごを他者に認めてもらいたい、少しでもカッコいいだんごを作りたいという思いが、だんごを作る技術に磨きをかけている。 ・T男が黒光りするだんごを作ったことで、ますます挑戦意欲が高まり、その結果、土に対する知識が深まり、親しみが生まれている。
16日 ・K男が土の色の違い、土が石のように固くなることに気づいた。	16日 3色の土を、利用してだんご作りを始める。 —土だんご作り—	
17日 ・T男の黒光りするだんごに魅力を感じた。	17日 黒光りするだんご作りが始まる。	

②事例の考察

○遊びのきっかけ

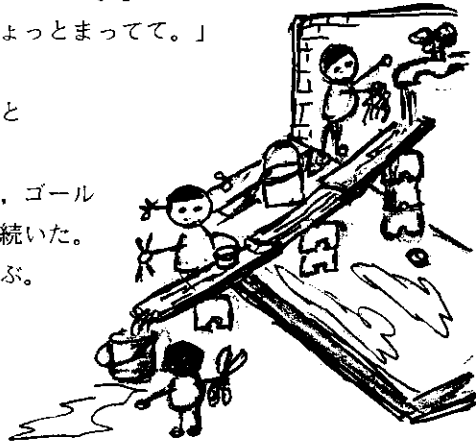
- ・「がんせきだ」という幼児の物に対するイメージが土だんご作りのきっかけとなっている。黒光りするだんごへの感動や驚きが次の展開のきっかけとなった。

○遊びの中で育つもの

- ・固いだんごを作りたい、黒光りするだんごを作りたいという挑戦意欲が生まれ、繰り返しだんご作りをする中で水の混ぜ具合や土の性質などを学んでいる。だんごを握る技術も繰り返し作る中で上達していった。

▷事例3

カードNo. 19	遊び名 流しそうめんごっこ	場所 足洗い場	園名 B幼稚園
日時 9年 9月29日(月) 11時05分~11時40分・続6日目		参加者 5人	
<ul style="list-style-type: none"> ・以前から樋、ヒューム管、ジャバラホースを使って水路遊びが行われ、今日も続いている。 ・樋から水が流れる様子を見ていたA男「あっ、これそうめんのやつみたい。」 ・Y男「ぼく、そうめんのざいりょう、いいものかんがえたよ。ちょっとまって。」 Y男は保育室からたこ糸とはさみを持ってきた。 ・たこ糸を固まりのまま、樋の上を水に乗せて流すが、箸ですくうと玉になってしまい、うまくいかない。 ・鉋で糸を切る役、蛇口で水の量を調節する役、茶碗と箸を渡す役、ゴールへ溜まった麺をスタートへ戻す役ができ、順調にそうめん流しが続いた。 ・はじめはごっこ遊びだったが、水の勢いを強くし糸も水も跳ね飛ぶ。 ・樋のジョイント部分を外し、滝を作ろうとしたがうまく水を流すことができず失敗を繰り返す。 ・翌日は樋の上をドングリやスコップを流して遊ぶ。ドングリは水の量と勢いによって、樋の外側に跳ね飛ぶ。 			
<p>備考：以前から使っていた樋と水から新しい遊びが展開し、今までと違った遊びの工夫が見られた。幼児のイメージの豊かさや頭の柔軟さに驚く。豊かなイメージと適切な用具、素材、場所が友達関係を広げ、遊びを発展させたと思われる。この遊びには足洗い場が適切な役割をはたしている。</p>			



遊びのきっかけ	活動の流れ	物とのかかわりの様子
<ul style="list-style-type: none"> ・ A男が流しそうめんのイメージを連想する。 ・ Y男がそうめんの材料を思いつく。 	<p style="text-align: center;">水路遊び</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">水路を利用して、たこ糸を流してみる。 -流しそうめんごっこ-</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">滝を作る</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">ドングリ・スコップ流し</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ いつも使っている樋から、そうめんを流す樋を連想したことで、樋を使った新しい遊びが展開する。 ・ Y男がイメージを共有し、適当なそうめんの材料を提供したことで、ごっこ遊びに発展し、より楽しい遊びになった。 ・ より本物らしくなるよう、試行錯誤し、試している（糸を切る。適切な水量、役割分担、樋の傾斜角度 など）。 ・ 水量を強くした事で麺が樋から飛び出した体験から水の力に関心をもった。 ・ 滝作りに繰り返し挑戦しているが、先行経験があまりないためだろうか、完成せずに終わってしまった。 ・ いろいろなものを材料として持ち寄り、跳ね飛び方や流れ方を試す遊びに変化し次の遊びに転換していく。

② 事例の考察

○遊びのきっかけ

- ・イメージを連想させやすい樋の存在が遊びに大きな役割を果たしている。
- ・A男やY男が物から受けた感じや、気づいたことを言葉で表現したことが、遊びのきっかけとなった。
- ・水の力がもつ不思議さや、驚きが新しい遊びのきっかけとなった。

○遊びの中で育つもの

- ・試行錯誤しながら、自分たちのイメージに近づけようとする行動の中で、水の量や力、樋の傾斜角度、仲間との関係など様々なことを知らず知らず学んでいる。
- ・遊びを仲間と共有し、楽しく展開させる手段として言葉がたくさん交わされている。自分の思いを伝える手だてとして、言語表現力が育っている。

(3) まとめ

① 戸外環境に必要な要素

○遊びが生まれた場所から（園庭マップを中心に）

記録を行った4園はそれぞれ固定遊具や砂場などのように各園に共通な戸外環境と、その園にしかない戸外環境をもっている。小学校の環境を幼稚園が借りて使用している場合もある。

各園の戸外環境マップを作成し、幼児の遊びがどこの場で記録されたのか記入してみると次のようなことが読み取れた。

幼児はよく小学校の固定遊具を使って遊んでいる。理由の一つとして、幼稚園の固定遊具は5歳児の成長発達に見合った大きさになっていないからだと考えられる。小学校の固定遊具は5歳児には少し大きく、練習をしないと思うように使いこなせないが、遊具の大きさと難しさに魅力を感じ、意欲的に挑戦しているようだ。また、挑戦する中で、様々な体の動きが体験できることも楽しさにつながっているのではないと思われる。

幼児が楽しさを感じる場所としてこの他に砂場とその周辺、自然（草花や樹木、昆虫など）に触れることができる場所、起伏（小山、斜面、凹凸があるなど）がある場所などがある。

これらの場所での遊び方をみると、はっきりした目的をもってその場へいく場合と、目的はないがある種の期待をもっていく場合が見られる。いずれの場合でも、幼児はそこで物や人にかかわることで遊びが始まる。

物、あるいは人を含めたその場の雰囲気幼児が引きつけられるということは、その環境が遊びの基となる様々な情報を発信しているからではないだろうか。

資料1の雑木林では、1年を通して幼児がかかわっている姿が見られる。事例1のバスごっこが行われた同じ

空間で「空飛ぶ絨毯ごっこ」も行われている。この遊びは斜面を絨毯（マット）で滑り降りる遊びだ。また、雑木林の隅に生えている竹を小枝でリズム打ちして竹から発する音の違いを楽しんでもいる。1年を通し雑木林の斜面や樹木は幼児に様々な楽しい情報を提供している。

遊びの情報を発信できる環境があることが、幼児が主体的に遊びに取り組んでいく意欲につながると考えることができるだろう。

情報を遊びにどのように生かしていくかは幼児の創造力によるが、遊びの情報を提供できることが、環境として重要な要素の一つと考えることができるだろう。

○経験している楽しさの内容から

カードには、自由にのびのびと体を動かすことを楽しんでいる様子が記録されている。

事例1のバスごっこでは、夢中になってスピード感やスリル感を味わったり、ちょっと難しいことに挑戦する中で、幼児は様々な運動機能を使いながら、知らず知らず幼児期に必要な調整力を高めている。

手足や体全体を思いきり動かすことは、固定遊具でもできるが、幼児にとって大切なのは、そのことに夢中になることである。夢中になって遊ぶ楽しさの中で、心身の充実感とともに体を思いきり動かす楽しさを味わっていることが事例1からも読み取れる。

幼児が感じる楽しさの側面から考えると、ちょっとした土の斜面や樹木があるだけで、幼児は自由に遊びを作り出し、ダイナミックに遊ぶエネルギーを生み出していけることが分かった。

幼児の遊びのほとんどから読み取れるのが、自分の考えを試したり、失敗したり、工夫したり、確かめたりという行動である。

遊びの中では、自然にこのような行動が繰り返し行われている。

この繰り返しがそのまま幼児期の遊びであり、夢中になれる原動力となっている。

つまり、失敗や挫折がなく完成してしまったり、自分の考えを盛り込んだり、工夫したりする余地がほとんどない活動には、楽しさを感じないともいえるだろう。

戸外環境要素の一つに、幼児が主体的に取り組む、試したり、工夫したり、確かめたりできる場を保障する必要があると言えるだろう。

遊びが生まれた場所と、経験している楽しさの内容の観点から、戸外環境に必要な要素をまとめると、次の3点になる。

- ・様々な遊びの情報を発信できる環境
- ・ダイナミックに体を動かせる環境
- ・様々な試しや確かめができる環境

②楽しさの中で育つもの

○遊びが生まれるきっかけから

幼児が物と向き合ったとき、「おもしろそうだな。」「これ、まえにみたことあるぞ。」「なにかやってみいな。」などの様々な心の動きがみられる。この心の動きがきっかけとなって、自ら物にかかわっていく力が生みだされ、主体的に遊びが展開されていく。

幼児が遊びを展開するきっかけをカードから読み取ると、おおよそ次のようにまとめられる。

- ・物に対するイメージからの連想
 - ・新しい発見
 - ・自然の美しさや不思議さなどへの感動や驚き
- 遊びのきっかけとなる、このような心を動かす感情を『遊びを作りだす力』ととらえた。

遊びを作りだすきっかけの中で多くを占めていたのは物に対するイメージからの連想と新しい発見であった。

イメージからの連想のきっかけとなる物の多くが、日常使用している何気ない道具であったり素材であったりした。日常使っている道具や素材は少し見方を変えると新しい遊具としての姿を見せてくれる。

このような遊具とは呼べないような物や素材が幼児の創造性を引き出す役割を果していることが多いようだ。

戸外環境にどのような遊具を準備するかで、幼児の遊びを作りだす力の育ちが違ってくることが分かった。

○遊びの中で育つもの（物とのかかわりを中心に）

遊びが楽しければ楽しいほど夢中になって遊ぶ。夢中になって物とかかわって遊ぶことを通して知らず知らず様々なことを学んでいる。

夢中になって物とかかわって遊んでいる態度の中に、『学びとっていく力』が育っている。

物とかかわって遊ぶ中で、次のような動きがみられた。

- ・試行錯誤する
- ・繰り返し挑戦する
- ・知らないことを探求する

遊びの中でより楽しさを実感するためには、感じたことや考えたこと、獲得した技術などを自分なりに表現していくことが大切なことが何れのカードからも読み取れた。この手だてを『表現していく力』とした。

楽しさを表現する方法として次のことがあげられる。

- ・体の動き
- ・言葉
- ・物を操作する技術

表現していく力は新しい遊びを作りだすきっかけにかかわる大切な力であると考えられる。

遊びが生まれるきっかけと、遊びの中で育つものの観点から、楽しさの中で次の力が育つことが分かった。

- ・遊びを作りだす力
- ・学びとっていく力
- ・表現していく力

3. 園庭や遊具の工夫と実践

記録カードの検討から、「遊びの情報を発信できる環境」「ダイナミックに体を動かせる環境」「いろいろな試しや確かめができる環境」という、楽しく遊ぶための戸外環境要素が把握できた。

また、幼児自身が遊びに必要な物を工夫して作りだしていく楽しさを味わえるような戸外環境を構成することが大切であることも分かった。そこで、それらの要素を兼ね備えた遊具を工夫する試みを行う。

(1) 戸外環境の素材を工夫する試み

①素材を決める

カードには、幼児が縄を使って遊んでいる姿が記録されている。例えば飛べる回数を数えながら飛ぶ「何回飛べる」や、縄の端と端を二人で持って、縄に通したバケツの中身がこぼれないように運ぶ「二人は仲良し」、教師が設定したアスレチックの素材としてなどその使い方は様々だ。

縄は幼児にとっては、その中に楽しさを見つけやすく親しみやすい素材であり、教師にとっては、他の遊具や素材と組み合わせやすく、幼児と共に構成していきやすいという性質をもっている。

このような性質を合わせもつ縄は戸外環境の素材として適切だろうと考え、試行を行ってみる。

②工夫の試み

《試行1》

◇テーマ：縄を下げる

◇期 間：平成9年11月下旬～2週間くらい。

◇設定内容：

- ・枝に直径1cmの綿縄を二重にして、1本下げる。
- ・枝に直径2cmのナイロン縄を、1本下げる。

◇目的：

- ・枝から下げた縄に、幼児はどのように取り組むのか見る。

◇遊びの様子：

- ・1日目ー「これなあに？どうやるの？」と言いながら縄に触ったり、動かしてみたりする。
- ・2日目ー直径1cmの綿縄にはあまり関心を示さない。直径2cmのナイロン縄には関心を示すが、自分たちからすすんで遊びを作りだす気配は感じられない。
- ・3日目以降ー縄の下方を教師が結んで瘤を作り、ターザンロープにして遊び方の見本を示す。幼児たちは縄を両手でしっかり握り、股の間に縄をはさんで乗りはじめるが、あまりうまくいかない。踏み台を置いたりして教師が援助することで、乗り方を体得してきた。

◇配慮したこと：

- ・幼児の体が不安定な時は、体を支え、後ろに転倒しないよう安全の確保に心掛けた。

◇考察：

- ・直径1cmの縄は多少関心は示したものの、縄を使って遊ぶ迄にはならなかった。この原因の一つに縄の細さが不安につながったことが考えられる。
- ・最近の幼児は先行経験が少なかったり、自分で創造して遊ぶことが少ないので、物にかかわり、自分で工夫して遊ぶことが苦手なようだ。教師がターザンロープとして見本を示すことにより、自分たちでもやってみようになる。

《試行ー2》

◇テーマ：縄を横に張ってみる

◇日時：平成10年3月上旬～1週間くらい

◇設定内容：

- ・近くにある太鼓橋とグローブジャングルジムの上に直径1cmの縄2本を平行に張る。地面から縄まで高さは低いところで20cm程。

◇目的：

- ・遊具と遊具の間に縄を横に張ることで、幼児は縄にどのように取り組むのかを見る。

◇遊びの様子：

- ・1日目ー横に張った縄に乗って渡り切ることに挑戦している。しかし途中で落ちてしまう子が多い。縄がたわんでしまい、バランスを取りづらい。縄渡りに取り組んではみるが何回か行ってうまくいかないとやめてしまう子も見られた。
- ・3日目ーだいぶ上手に渡れるようになってきた。渡るようになったことを教師に認めてもらいたいため、盛んに声をかける。運動好きな子が遊んでいる。
- ・4日目以降ー「金メダルに挑戦」と呼ぶ自分たちで作った空間（太鼓橋→縄→グローブジャングルジム→ケ

ーブルドラム→太鼓橋）を一巡する遊びが始まる。

◇配慮したこと：

- ・固定遊具と遊具の間のスペースを考慮して縄を張る。
- ・幼児が工夫したことが実現できるよう、幼児の思いにそって必要なものを提供するようにした。

◇考察：

- ・縄を横に渡すだけでは、幼児の多様な体の動きを誘発することは難しいようだ。
- ・幼児は縄のほかに別の遊具や素材を加えることで楽しんでいる。周囲にケーブルドラムや板などが置いてあることで、遊びが広がっていった。周囲にどのような物があるかによって縄の遊び方が変わっていく。教師は幼児の思いを敏感に感じ取り、創造的な遊びが展開できるよう、教材、素材などを準備しておくことが大切である。

③まとめ

- ・縄の太さや長さが幼児の遊び方や動き、安全性などに影響を与えるため、常設の遊具として設置する場合には、十分配慮する必要がある。
- ・縄は幼児に親しみやすく、自分の力や、方法で自由に取り組み、誰でもそれなりの楽しさが味わえる。
- ・縄を上下2段に、平行に張るだけでは幼児の多様な動きを誘発することが難しい。他の形を工夫することで新しい魅力が生まれると思われる。
- ・縄を固定遊具や木などに結び付けただけでは、様々な情報を提供できない。教師が幼児と共に、縄の使い方を意図的に構成し、変化させていくことが必要と考える。

(2) 戸外環境を変化させる

①A園の環境と幼児の様子

側溝内側の庭はボール遊びや鬼ごっこ、縄跳びなどによく活用されているが、南側に一列に設置されている固定遊具はほとんど活用されていない。園舎西側にあるブランコは毎日誰かが利用している。ブランコの前に位置するグローブジャングルジムは諸事情で回転しないよう固定されている。そのため遊具としての魅力が失われてしまっている。

園庭南側の側溝前に銀杏やモミなどの樹木が平行に植えられているがこの樹木は遊びの障地などとして利用され、親しまれている。

男児の戸外遊びの種類や活動時間に比べ、女児はいずれも少なく、室内遊びを楽しむ傾向にある。しかし、教師が設定するダイナミックな遊びは男女問わず多くの幼児が参加し、意欲的に挑戦する。

②環境の工夫と構成

以下、木製やぐらと縄の遊具の設置について記録する。

○木製やぐらの設置

やぐらはブランコとグローブジャングルジムが設置されている西側の空間に設置する。

この空間は側溝と塀の間にあり、今まで通路としての役割が強く、教師は遊び場としてあまり意識していなかった場所である。この空間にやぐらを設置し、幼児と共に環境を変化させていくことで、遊びの情報が提供できるような場にしていきたい。

やぐら本体は10cm角の柱を用い、横木は幅10cm、厚さ5cmの木材を使用し、床には厚さ2cmの木材を使用する。木材の接合部分はボルトとナットを使用して締める。

やぐらは2層で、下段は縁の下のイメージで活用できるように、また上段は多目的に活用できるような構造を考えた。

周囲には雑草を運んできて植えたり、体が隠せるくらいの植木を移植する。またやぐらの周囲は整地や雑草取りなどをあまり行わず、できるだけ自然に近い雰囲気がかもし出されるよう配慮し、少しでも多くの情報が提供できるよう工夫する。

(資料3—木製やぐら P80.81 参照)

○縄の遊具を設置

昨年度の試行の結果から、縄の太さや長さ、形を工夫することで、新しい遊具として十分活用できることが確かめられている。単純な形に縄を設置することで、幼児が縄の活用方法を工夫したり、自分なりに自由に挑戦できる楽しさを味わえるようにしたい。

試行の結果を基に、縄の太さは横に張る縄は幼児が体を預けても安定感がある直径3cmの麻縄とし、垂直に下げる縄は直径2cmの麻縄とする。麻縄は摩擦に強いので戸外に設置する場合には有効だと考えた。

横に張る縄の形は、一直線に張るもの(A)と、樹木に巻き付け、上から見ると楕円形をしているもの(B)の2種類を設置してみる。また、木の幹に縄を幾重か巻き付けることで、そこを手掛かりにして木登りの雰囲気が味わえるようにした。

上から下げたもの(C)は、幹から1m以上離して枝から下げ、幼児が縄にぶら下がった時、木の幹を蹴ることで自由に縄の揺れを楽しめるよう工夫した。

縄は幼児が遊んでいる間にゆるんでくるため、定期的に締めなおすことが必要である。その際、幼児たちの意見を聞きながら、心身の成長発達に合わせ、縄の高さを変化させるようにする。

(資料4—縄の遊具 P82.83 参照)

③教師間で話し合ってきたこと

・手作り遊具の安全性について

縄を使用して作る遊具については、幼児が思いのまま自由に体を動かして遊ぶことで、思わぬ事故につながりかねない。常設遊具としての縄の安全性や、周囲の環境には十分な配慮を行うよう心がける。また定期的に点検を行い、安全の確認をしていく。やぐらは地上から1mほどのところに床があるので、飛び上がったり、飛び下りたりする動きが活発に行われると予想される。木と木の接合部分にはボルトを使用し、体が触れてもできるだけ怪我につながらないように配慮する。

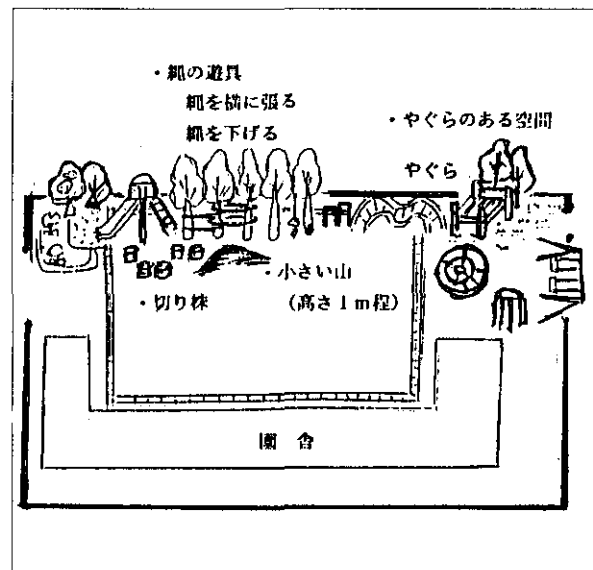
・教師の援助について

幼児が新しい動きを行ったときには教師もできる限り一緒に行ってみて、安全性を確認していく。教師間の連絡を密に行い、少しでも不安を感じた時にはすぐに話し合い、その後の方向を考えていくことにする。幼児が遊びを創造しづらい時には、教師が遊びの見本を示したり、教師の意図にそった素材を周囲に置いたりしながら幼児の心や動きを引き出すようにする。

・遊具の設置場所について

新しい遊具を設置する場合、現在使用している場が使いにくくならないようにすることを第一とした。このことは、教師自身がまだ環境を大きく変化させることに多少不安をもっているためでもある。樹木の間を利用して縄を張り、やぐらを作ったことで固定遊具の間がつながり、幼児の動線が広がるのが期待される。また、やぐらを今まで通路としての役割が大きかった場所に設置したことで、側溝の中側の庭とは遊ぶ目的や内容が違った雰囲気をもつ庭として幼児に利用されることが期待される。

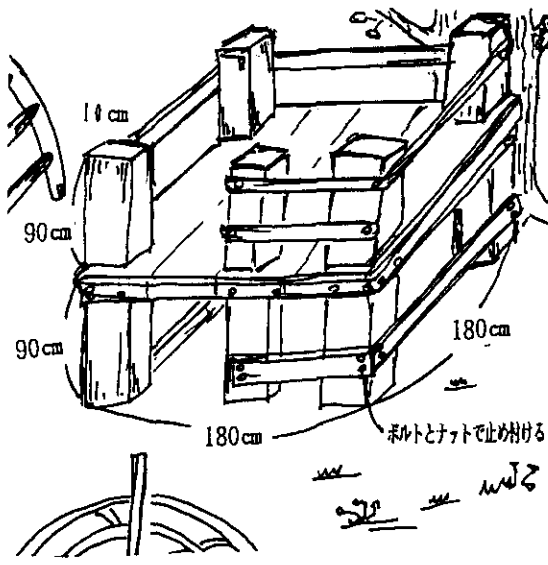
▷資料2—A園の園庭(工夫後の全体図)



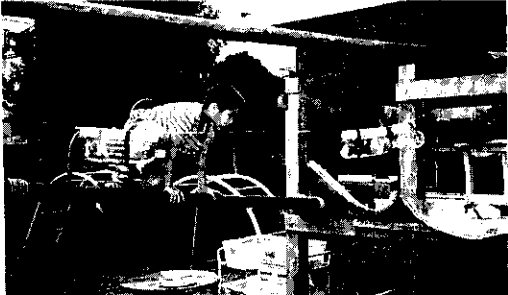
③遊びの実際

幼児たちがやぐらと縄の遊具を使って、どのように遊んだかを報告する。

▷資料3 - 木製やぐらの図

木製やぐら	設置 10年 6月初旬	<p>《設置において配慮した点》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・固定遊具間の位置関係や使われ方、やぐらの目的から考え設置場所を工夫する。 ・やぐらの床面の高さを幼児が飛びついて登れる高さ、下段は中腰で歩いたりしゃがんで作業ができる高さにする。 ・柱に溝を掘り横木を取り付け、ボルトとナットで締める。 ・畳2畳の広さはほとんどの遊びに対応できる。 ・木の温かみを伝えたい。 ・この場の情報を豊かにするため、周囲に遊びに必要な草花を植え、遊びに使えるような小石などを置く。
		<p>《予想されるかかわり方》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊びの基地 (ままごと、○□マンごっこ など) ・おいかけっこ (よじ登る、飛び下りる など) ・休息の場 ・隠れ場所

▷事例4

遊び名 向こうに渡る橋を作ろう	10年 7月 2日(木) 記録	No. 3
<p>・やぐらに寝ころんでいろいろな話をしていたH男、T男、K男と教師。突然H男が「むこうにわたれるともっといいのに。」T男、K男「そうだよな。わたれるといいな。」</p> <p>・教師「そうだね、渡れるといいわね。」</p> <p>・3人「せんせい、むこうにわたるはしをつくりたい。つくろうよ。」</p> <p>・教師「どうやって作ろうか。何で作る？」</p> <p>・H男「あそこにあるぼう(丸太)のできるんじゃない？」</p> <p>3人で丸太1本を運んで来てやぐらとグローブジャングルジムに渡してみる。2本では心もとなく、もう1本付け加える。</p> <p>・教師「さて、どうやってやぐらと橋を止めつけようか？」</p> <p>・3人「くぎがいいんじゃないか?」「そうかなー」</p> <p>「くぎじゃとどかないんじゃないか?」しばらく困っている。</p> <p>・教師「縄で結ぶ方法はどうかしら?」と細縄を持ってくる。</p> <p>・3人で結んでいたがうまく結べず、教師も手伝う。</p> <p>・渡り始めたが怖いようで、手すり用に細縄をやぐらとグローブジャングルに自分たちで結びつけて渡り始める。「ほら、これならわたれるよ。」「ヤッター!」</p> <p>※橋を作ってから、自分たちで鬼ごっこに利用したり、ままごとの道具を運んできたりするようになった。</p>		
<p>《考察》・幼児3人と教師が丸太を利用して、グローブジャングルジムとやぐらに橋を渡したことが、その後のこの空間での遊びが幼児の側から広がっていったきっかけとなった。</p> <p>・幼児の思いにそった環境作りを行う時、教師が幼児の思いを汲み取ってその場を変化させるのではなく、幼児も共に参加する形で環境を変化させていくことで、その場や物に対する意識が強まりその後の遊び方に差が出る。</p>		<p>写真「わたってみよう」</p> 

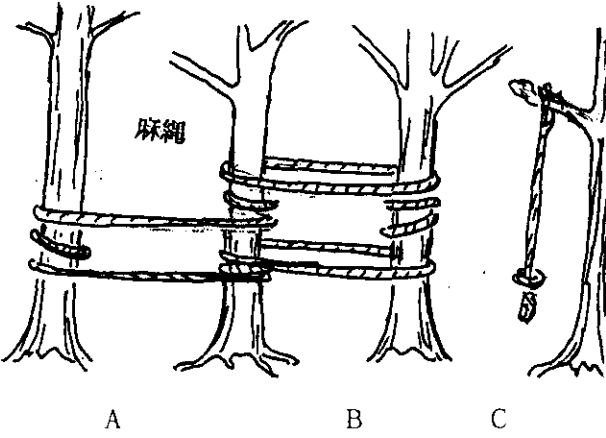
やぐらのある空間での遊びの流れ(例)

	《 》-遊び名	・-遊びの姿	↓-遊びの流れ	□-教師の援助,	——-環境構成
7月	《丸太の橋作り》事例4に記載				
9月	《狼とこやぎの鬼ごっこ》 ・こやぎの家をやぐら、狼の家を銀杏の木に決める。 ・やぐらの上段に駆け上がるスリルを楽しんでいる。	走って来てやぐらに駆け上がるので、安全確認のため、やぐらの側にいる。	《魚釣りごっこ》 ・やぐらを船に見立て、空き箱の魚を、竿でつり上げる。 《ポケモンごっこ》 ・家として使用する。しばらくするとままごとへ移っていった。		竹竿を人数分準備する。
10月	・自分たちで鬼ごっこのルールを考え、遊びは始めるが「そんなルール、僕知らない。」など、全員にルールが行き渡っていない。そのため、喧嘩が起きることもある。 ・橋の上を小走りでも渡れるようになり、こやぎの家がグロブジャングルジムまで広がり、動きがダイナミックになる。	教師が鬼ごっこに加わって遊びながらも少しずつ自分達で遊べるよう身を引いていく。問題が生じた時は話しに加わる。	《ままごと》 ・やぐらの下段にごさを敷き、銀杏の葉を採って来ては濡らした砂と混ぜたり、葉っぱの上に砂を載せたりして遊ぶ。 ・砂場用具ワゴンをやぐらのそばまで引いてきて道具を使い始めるが、移動が大変であり使われなくなる。 「お鍋やお皿、ここに少し置いておきたいな。」 ・コーナー周辺の地面の土を掘って、コーヒーにしたり周辺の雑草を使っておかずを利用する。		遊びに必要な草花を、この空間に移植する。
11月	・仲間を募るが、2~3人しか集まらず、鬼ごっこが成立しない日が続く。 《休息の場》 ・ドッチボールやサッカーなど運動量が多い遊びが盛んに行われるようになった。これらの遊びが一段落した時や、遊びの途中で疲れを取るための休息の場としてやぐらを使うようになる。	一緒に遊びながら、橋の近くで安全への配慮を行う	《お店屋ごっこ》 ・土の質の違いや、砂の質の違いを上手に利用した遊びが展開されるようになる。 「先生、このクッキーは明日、固くなっているんだよ。」 「マグロのお寿司はいかがですか。」 [コーヒー、クッキーは赤土、お寿司、ご飯等は黒土等]		必要なお鍋やお皿を収納しておく棚や、調理台を準備する。調理台は幼児と一緒に前に作ったすのこを利用。
12月	《狼とこやぎの鬼ごっこ》 ・久しぶりに鬼ごっこが始まった。巧技台を利用して階段を作ったことで、やぐらの使い方や、体の動きに変化が見られるようになる。	室内で不要になった巧技台をやぐらの側に運び出す。自由に利用してよいことを幼児に伝えておく。	《盆踊り》 ・やぐらの上で太鼓を叩き、曲に合わせて踊っている。 ・ドラムの高さがテーブルに具合がよいので、ままごと以外にも幼児の話し合いや相談の場として使われる。		太鼓やカセットテープ等の準備をする。 大型のケーブルドラムが手に入ったので、テーブルとして調理台のそばに置く。
1月		幼児の様子でごさを敷いたり、段ボール版を敷いたりして、休息しやすいように配慮する。			
2月	《家作り》 ・功技台、板、机などを組み合わせてやぐらにつなげた家を作る。(男児数人) ・やぐらの下段にすのこを敷き、寒さを防ぐために、ごさや板を張り家を作る。	体力がついたことや運動能力が育ったことでいろいろな体の動きが見られるようになる。適切な動きをしているかどうか一緒に遊びながら個々の力を押し量りながら援助していく。			
2月		援助を求められた時にはアドバイスをする程度にとどめ、幼児の主体性を引き出すようにする。	《アスレチックごっこ》 ・固定遊具や巧技台、板、縄等を使って、小さなアスレチックを作っている。 ・2月に縄ブランコを柱に取り付ける。積み木も室内から持ち出し、加えている。		教師が設定をしたり、幼児が付け足したりなど、その場の状況を見ながら、一緒に楽しむようにする。
考察	<p>・夢中になって取り組む遊びではなくても、幼児はこの空間に毎日必ず足を運んでいる。足を運ぶ一人一人の思いは違うがそれぞれがこの空間で何かを得ていることは、幼児の表情、教師や友達に投げかける言葉、体の動きなどで推察できる。</p> <p>・1月に入り、ようやく自分たちで、身のまわりにあるものを使ってイメージにそったものを作ったり、先行経験を基にした遊びが展開できるようになってきた。今年は6月にこの空間を作りはじめ、教師も試行錯誤で取り組んできたため、この空間を幼児が自分たちのものにするために時間がかかってしまったと考えられる。来年は、今年の幼児が遊んだ跡がこの空間に残っているので、幼児にとってもっと身近な場になることが期待される。</p>				

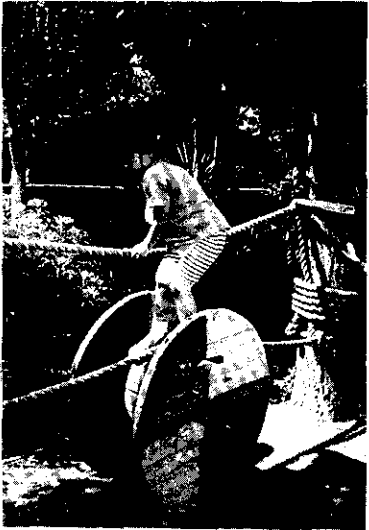
写真「おすしやでーす。」




▷資料4－繩の遊具図

繩の遊具見取り図	設置 10年 6月初旬	<p>《設置において配慮した点》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・固定遊具間の位置関係や使われ方を予想して、設置場所を木と木の間にする。 ・各繩の種類、太さ、場所、繩の長さなどに配慮する。木と木に渡した繩は、綱引きに使用する直径3cmの麻繩、ターザンロープには、直径2cmの麻繩を使用。 ・繩を木に巻き付けて、遊びの手掛かりとする。 								
		<p>《予想されるかかわり方》</p> <table border="0"> <tr> <td>○繩を張った場</td> <td>○ターザンロープ</td> </tr> <tr> <td>・渡る</td> <td>・飛びつく</td> </tr> <tr> <td>・ぶら下がる</td> <td>・揺らす</td> </tr> <tr> <td>・繩の下を這う</td> <td>・飛び下りる</td> </tr> </table>	○繩を張った場	○ターザンロープ	・渡る	・飛びつく	・ぶら下がる	・揺らす	・繩の下を這う	・飛び下りる
○繩を張った場	○ターザンロープ									
・渡る	・飛びつく									
・ぶら下がる	・揺らす									
・繩の下を這う	・飛び下りる									


▷事例6

遊び名 いいことかんがえた	10年 9月24日(木)	記録 No. 7
<p>・S子は9月に入り、ケーブルドラム乗りに挑戦している。いつも友だちが乗る様子をじっと見ている。</p> <p>・体を動かして遊ぶことが苦手なS子は、ある日、意を決してドラムの上に立ってみた。ドラムの輪がクルリとまわり、S子はあっという間に地面に落ちる。お尻が痛かったのだろう。目に涙が溜まっている。</p> <p>・S子「せんせいてつだって。ずっとてをはなさないで！」と教師の手をギュッと握ってくる。声をかけて援助するが、しばらくすると「もういいよ。やめる。」とやめてしまうことが度々見られた。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>・S子「せんせい、みて、みて！」横に平行に張った繩の所へ、ケーブルドラムを運んで行き、上の繩を手でたぐり寄せながらドラム乗りの練習を一人で行っている。</p> <p>・「いいことかんがえたよ。せんせい、ほらのれたでしょ。」S子の得意そうな笑顔と弾んだ声が響いてくる。</p> <p>・S子様子を見て、S男が同じことを始める。自分でケーブルドラムを動かした満足感が笑顔にあらわれている。</p>		
<p>《考察》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・繩を平行棒のように2段に張ってあるコーナー（資料4-B）は多様な体の動きが工夫できる。平行に張ってある繩を利用してぐり回りや、樹木に巻き付けてある繩を手掛かりに木登りをしたりしている。 ・S子の繩の使い方に教師が驚いた。ケーブルドラムへ乗りたいという思いが身のまわりにある繩を利用して練習することを思いつかせたのだろう。物を見る目や、幼児の頭の柔軟さや、発想の豊かさなど学ぶものがあった。 ・幼児の心身の発達に合わせて繩の高さを変えていくことにより、多様な体の動きや繩の使い方が予想される。今後、さらに繩の太さや、高さ、長さなどの工夫を行うことで新しい発見や繩への挑戦が見られると考えられる。 		<p>写真「せんせい、みて！」</p> 

▷事例7

遊び名 ターザンローブを使って	11年 1月 21日(木) 記録 No.11
<p>・設置以後この遊具は大賑わい。この遊具の魅力は揺れることにある。揺れる方向が一定していないところがブランコとは違う魅力になっている。作りたての頃は教師が遊びのリーダーだった。しかし2学期中頃には日々挑戦している幼児の方がずっと上手に揺れを自分のものにして楽しんでいる。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>・T男「Dちゃん、たちのりできる?ぼくできるよほら。」T男は切り株の上から勢いよく縄を持って飛び出す。 ・D男「わーすごいね。」D男はT男の乗り方をじっと見ている。 翌日からD男が練習する姿が見られるようになる。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>・D男、A男「ぼくたち、しまへとびうつれるよ。みてて。」 切り株から縄を使って上手に島渡りができるようになる。 ・日を重ねるにつれだんだん島の距離が遠くなる。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>・S男「せんせい、くつとばしやっているの。あそこまでだよ。」 ・A男「だれのがうまくとぶかきょうそうしてるの。」 ・ターザンローブに体を預けて、靴とばしをする。</p>	
<p>《考察》・この場にはいつも複数の子がいて活気がある。それはこの遊具が一人で黙々と挑戦し、技術を磨くより、友達とワイワイガヤガヤ言いながら一緒に遊びを作りだして楽しむことに適しているからだと考えられる。</p> <p>・人とのかわりがもて、遊びが多様に考えだせる遊具としてはこのような素朴で、単純な形が効果があることが分かった。</p>	<p style="text-align: center;">写真「しまへとびうつるよ」</p> 

▷事例8

遊び名 縄のブランコ	11年 2月 15日(月) 記録 No.15
<p>・9月、M子の希望でやぐらとグローブジャングルジムの間に渡してある丸太に、縄ブランコをM子と一緒に作った。しかし、それほど人気がなく1週間ほどで取り外す。人気がない理由として縄の太さが考えられる。直径1cmの縄は腰を掛けると痛い。この時使った縄は玄関に置いた段ボール箱の中にずっと入れてある。</p> <p>・1月に入り、M子が再度縄ブランコをやりたいと教師に伝えてきた。M子は縄箱の直径2cmの太い綿縄を使いたいと言う。この縄で教師とブランコ作りを行う。丸太に縄の両端を結び付けた単純な形である。</p> <p>・幼児は自由にいろいろな体の動きを楽しんでいる。縄ブランコとして活用するだけでなく、待ち合わせの場や休息の場などにも活用している。</p>	
<p>《考察》・運動機能が育ってきた3学期には、いろいろな乗り方が工夫できるようになっている。単純な縄のブランコがいろいろな動きを誘発している。</p> <p>・縄は素材や太さ、長さなどが微妙に遊びや幼児の意欲に影響を与えている。何種類かの縄を決めた場所に用意しておくことが大切である。</p>	<p style="text-align: center;">写真「わたしのブランコにのろう」</p> 

(3) まとめ

○やぐらのある空間から

- ・やぐらを中心に、遊びの情報をもつ空間作りを行った結果、この空間で幼児は自然に親しんだり、泥んこ遊び、アスレチック、鬼ごっこなど多様な遊びを主体的に展開する姿が見られるようになった。まだ豊かな情報をもつ空間にはなっていないが、幼児にとって情報が遊びのきっかけとなり、楽しさを生み出すことが明らかになった。
- ・この空間は、物が遊びを作り出す重要な役割を担っている。教師が周囲に何を準備するか、また幼児が何に着目するかによって遊びが決まってくることが多い。この場合は特に教師の環境に対する考え方や取り組み方がそのまま遊びに反映されやすい空間であると言える。

○縄の遊具から

- ・誰もが親しめ、簡単にかかわることができる縄は遊具としてよく用いられているが、今回固定遊具として設置したことで幼児は縄をより身近かに感じ、その子なりにかかわっている姿が一年中見られた。縄の種類、太さ、長さ、形などを工夫したことで幼児のかかわりは教師の予想した以上のものとなった。

Ⅲ 研究のまとめと今後の課題

1. 研究のまとめ

- ・すすんで環境にかかわって遊ぶ子を育てるためには、従来の機能を重視した固定遊具や園庭にかわり、幼児が自ら環境にかかわって創造することが可能な戸外環境の構成が大切である。
- ・戸外遊びが楽しいと実感できるために必要な、戸外環境の要素が分かった。この要素と園の特性を考慮した園庭や遊具の工夫をすることが大切である。
- ・既存の遊具の他に、幼児は日常使用している何気ない道具や、工事などに使用する素材や廃材などに、柔軟に対応し、多様な発想で遊びに活用していく。このような素材や道具を幼児の身のまわりに多く準備していくことが大切である。

2. 今後の課題

- ・1年保育児を対象に、園庭や遊具の工夫を行ってきたが、今後は5歳児に限らず、幼児期の誰もが楽しさを実感できる園庭や遊具のあり方を探っていく必要がある。幼児の発達にそった物とのかかわりの方を探っていくことで、更に望ましい園庭や遊具の構成が可能になると考える。

- ・自分なりの遊び方を工夫していく園庭や遊具に戸惑う幼児の実態が見えてきた。家庭での先行経験が少なくなってきた今日、自ら遊びを作りだしていく楽しさを味わうことは難しくなっているようだ。今後の教師の役割として幼児と共に遊びを作り出す仲間として遊びの見本を示していくことが、環境の工夫や構成などと同時に行われていかなければならないだろう。これからの教師の援助のあり方についても研究を広げていく必要があると考える。

おわりに

本研究をすすめるにあたり、丁寧かつ適切なお指導・ご助言をいただきました先生方、またこの研究を援助してくださった研究担当者所属園の園長先生、並びに教職員の皆様に心より感謝とお礼を申し上げたいと思います。

【参考文献】

- 文部省『幼児期からの心の教育のあり方について』 1998年
全国幼稚園長会事務局「幼稚園じほう」1996年10月号
柴崎 正行 著『保育環境の構成』 1997年
文部省『幼稚園における園具、遊具、教具』 1998年
全国幼稚園教育研究協議会
『たくましく生きる力を身に付け自立を促すための施設・設備・園具・遊具等のあり方』 1997年
北海道教育委員会 文部省委託研究報告書
『園具・遊具等の具体的活用』 1997年
文部省幼稚園課内幼稚園教育研究会
『幼児一人一人のよさと可能性を求めて』 1998年
宇都宮大学教育学部附属幼稚園研究紀要第3号
「教育環境を見直す」 1995年

【指導助言者】

- 東京家政大学教授 柴崎 正行
(川崎市総合教育センター専門員)
共立大学教授 榎原 肇
(前川崎市総合教育センター専門員)
国立特殊教育総合研究所肢体不自由教育研究室長 滝坂 信一
川崎市立古市場小学校付属幼稚園長 森山 泉